

小麦粉にまみれ働く我的手は触れるところが
みな白くなる
佐久間得幸

ケーンケン雉になりきり鳴く吾子は桃太郎よ
り前で戦う
七月号・吉本万登賀

江の島の椿の花は赤く咲きキエフの春ははる
かに遠い
伊井かずひろ

無理解と秩序と林檎とダブスタと言葉になら
ない物の致死量
椛 望子

裏返り干さるるポート明るさを押さえて川の
岸辺にありぬ
朝倉 恵子

吹く風に髪掴まれて背泳ぎのポーズのままに
さらはれてゆく
八月号・加利川友子

初めて作品評を担当した。作品に付箋を
つけていくなかで、歌会と作品評の選歌の
違いについて考えた。歌会では複数の人が
歌を選ぶ。自分が良さに気付かなかった歌
も、大体どなたかが選んでいて評も聞ける。

作品評は指定された範囲内から一人を選ぶ
ため、一首一首を丹念に読み、あらゆるパ
ターンの歌の良さに気付く必要があった。

簡単なことではないけれど、歌会と違い作
者名がわかり、お一人につき複数の歌を読
めることが作品との距離を縮めてくれた。

面識のない方の作品でも、人となりが伝
わってきた。沢山の素晴らしい歌と出会え
て幸せな時間だったと思う。

「秀歌三十首」について。場面と歌意が
わかりやすく、ほぼ定型で調べのいい作品
が集まった。また、素材が何であつても、

短歌はやはり着眼が命と思わされる。武藤
作の柔軟な発想、岸並作の独創的な表現に
はいつも唸らされた。コロナ禍は三年目に
入り、目と眉毛で話す日々が続く。湊作の
屈託のなさに救われた。厳しい世相を反映
してのことか、無職、退職、転職の歌が一
首ずつある。いずれもその作者にしか表現
し得ない、人生の奥深いドラマが感じられ
る。そして、岡田恵美子さん、北川秀子さ
んは、記憶に残る秀歌を私達に何げなく手
渡して下さり、旅立ってしまった。

二月末には、ロシアによるウクライナ侵
攻が始まった。六月号以降、関連の歌が急
増し、皆さん深く心を傷めておられた。他
国で起きた戦争をどう詠むべきか難しいが、
福崎作は怖い一首で、平和ボケした頭を覚
醒させる力がある。伊井作は切ない。多く

の読者が共に赤い椿の傍らに立ち、遠い春
へ祈りのまなざしを向けたことだろう。
結社誌を真剣に読むと、読みと詠み、両
方の勉強になると改めて実感しました。あ
りがとうございました。珍説や誤読があつ
たら、申し訳ありません。

最後に九月号の作品から。
・ハウリングがすかに続くマイクにて間投
詞なく流れる批評 奥村 知世
・あかんぼがちっちゃな踵つっぱった空の
向こうに戦争がある 小峰 圭子
・風にすぐほどこけてしまいたくさんのリボ
ンをつけて春は生まれる 平山 志保
・初任から四十回目の年度越え思ひ重なり
重ひ重なる 西村 徹
・見入る子も見らるる亀も首伸ばし背の春
陽を分け合ふ社 古川 勝子